



年齢と福を授ける年神様

お正月は1年で最大のリセットのチャンス

楽しいお正月を過ごされましたか。このときばかりは日本中が伝統にならない、特別なときを過ごします。お正月の準備は「年神様」を迎えるものといわれますが、「年神様」はどこから何をしに来るのでしょうか。しきたりに隠された意味から、お正月とは本来どのようなものなのか、考えてみましょう。

すべてをゼロにして 新しく始める

今では年が明けけるのはもちろん1月1日のことです。しかし、太陽暦の二十四節気では立春が新しい年の始まりでした。立春が新年なら、その前日の節分は大晦日ということになります。一方、明治5年(1872)まで使われていた旧暦(太陰暦)では1月1日は現在の1月の後半くらいにあたりますので、このころまで、人びとは非常に接近して二度の「お正月」を迎えてきたことになりました。

お正月というのは基本的には「リセット」のときです。旧年のものは一度全部なしにして、まっさらにしてから新しい年を迎える。だから新年を迎える前に大祓(おほはらい)と称して、旧年中の罪やケガレを祓うためのさまざまな神事があったり、除夜の鐘を撞いて煩惱を追い払ったりするのです。節分に豆をまくのも、立春の前日

に邪気を祓うためのもの。神様も仏様も関係なく、きれいに清めてから新年に福を迎えます。

先祖の御霊としての 年神様が戻るとき

年神様の正体の一つは、先祖の御霊。柳田国男や折口信夫(しのぶ)によると、先祖の御霊を迎え祭る行事は、年に2回、お盆とお正月にあるといいます。そのとき供えるものは炭水化物と魚。夏はそうめんとお盆サバ。冬は年取り膳(ご飯)と年取り魚のブリやサケ。お中元やお歳暮は生きている両親の生命力を高めるために、こうした供物を親の元へ持っていくのが起源です。生きている親の御霊も亡くなった親や先祖の御霊も一緒に祭ったのです。

なき人の くる夜と聞けど 君もなし
わがすむ宿や たまなきの里

『和泉式部集』

和泉式部が大晦日の夜に詠んだとされる歌です。「たまなきの里」などという地名だから、あなたの魂は来てくれないのね、と嘆いています。平安後期の『詞花和歌集』にも、

魂祭る 年の終りに なりにけり
今日にやまたも あはむとすらむ

という曾禰好忠の歌があり、平安時代の京都では晦日元旦には死んだ人の魂が帰ると考えられていたのが分かります。

ところが鎌倉時代から南北朝期になると、吉田兼好が『徒然草』に「なき人の来る夜とて魂まつるわざは、この比都にはなきを、東のかたには、なほする事にてありしこそあはれなりしか」と書いています。田舎の関東ではまだお正月に先祖の御霊を祭っているようですが、京都ではもうそんなことはしなくなったとい、少しづつ先祖の御霊祭りはお盆のほ

うが主となっていったのが分かります。
稲米の魂をもらって
一つ年を取る

ところで、お正月につきものの「お年玉」というのは、今では親や親戚から子どもにあげるお金と思われていますが、実は伝統的には餅がよく使われてきました。その秋に採れた新米は、9月の神嘗祭にまず神様に供え、私たち人間は、11月の新嘗祭でご飯を食べ、年末に搗いた餅をお正月に雑煮で食べる。さらに七草粥や小正月の小豆粥で食べます。そうして収穫した稲米のパワーを何度にも分けて身体に取り込みます。すると1年かかってきた稲米の魂が一つ身体に入り、一つ年を取る、それが数え年の考え方です。年玉の玉は魂のこと。取った年玉の数が年齢というわけです。その「年玉」を私たち人間に授けるのは、お父さんでも親戚のおじさんでもなく、「年神様」

なのだとか昔から考えられてきました。

年神様が持つてくる 二つのもの

江戸時代の町人の間では、先祖の御霊とはまた違う、「正月様」とか「歳徳神」という年神様がお正月に来るといって考えが流行りました。年神様がやって来るから、しめ縄を張り松飾りを飾って家屋を神聖にしておく。門松は年神様への目印、

そして「きれいにしてありますからどうぞ」というメッセージ。年神様は晦日の夜にそっとやって来ます。

何をしに来るかという点、年玉を持つてきて「年齢」と「福」を人びとに授けるのです。「年齢」はもう授かりたくないという人もいるかもしれませんが、それでも授からないわけにはいかず、年玉には魂のパワーが含まれているのですから、長寿を願う意味からも受け取らない

わけにはいきません。

年神様はどんな姿をしているのか、と聞かれることもよくあります。飛鳥時代の角髪を結ったような絵を描いて「先生どうですか？」と聞くイラストレーターさんもいますが、さてどうでしょう。姫神様の歳徳神、長寿の老人のような姿、また鬼の姿もあります。日本各地で実にさまざまなイメージで語られています。

秋田のナマハゲ、甌島のトシドン、能登半島のアマメハギなどは、お正月の来訪神を仮装で再現したものととして柳田・折口両氏が注目しています。門付芸人や三河萬歳といったさまざまな芸能を演じてみせる新春の来訪者も、年神様の来訪をアレンジして可視化・演技化したものといえます。

初詣の歴史は 意外と新しい

年神様は本来やって来るのを待つもの。けれども江戸時代の終わりにになると、町方では福の神を早く迎えたいからと、暗いうちから自分から出かけるようになり、ます。歳徳さんは恵方から来るといわれます。いい運氣をもらうために恵方にある神社やお寺にお参りする「恵方参り」というのが流行りました。

早く行かないと福を奪われちゃうと競って初詣をするようになったのは明治になってから。有名寺社に参拝客を運ぶため、鉄道の敷設さえ進みました。でも福

は限りがあるものではないので、初詣に行きそびれた人もゆっくり行けば大丈夫。安心してください。

霊力を補給する お正月のごちそう

鏡餅は「歯固めの餅」とも呼ばれ、『源氏物語』にも登場しています。年齢の齢という字には「齒」がついています。歯が硬くないと長生きできないと、昔から歯はとても大事に思われてきました。白く硬いことから歯を連想したのでしょう。霊力を持つ鏡や魂の形に整えられ、実際食べた力も入ります。

鏡餅の上には年取り魚やゆずりは、橙などを飾ります。ゆずりは赤い葉脈が血脈を連想させ、常緑の葉は生命力と繁栄の象徴、若い葉に譲るように葉が落ちることから、世代交代や子孫繁栄になぞらえられます。橙のオレンジ色は太陽の再生を意味します。今もみかんや橙は鏡餅につきものですね。『枕草子』で清少納言は、ゆずりはを、死んだ人にも供えるし、生きた人の歯固め(鏡餅)の飾りにも用いるのはヘンだと述べていますが、いやいや、死者から生者へとつながる靈魂という感覚を表しているんですよ、って清少納言に教えてあげたいくらいです。でもそんなことしたら「知ったかぶりする老人は嫌い」なあって、彼女の随筆に書かれてしまいそうですけどね(笑)。おせちは神様にお供えるものではない



アマメハギ(石川県鳳珠郡能登町) 撮影: 森井禎紹

く、「お節」「節供」つまり節句の食べ物、季節の変わり目に食べるごちそうのことです。毎日働いていると生命力が弱くなります。春から夏にかけて節句がたくさんありますが、それぞれ特色のある餅や酒で霊力補給をしているのです。スマホも充電がなくなると困るでしょう？人間も生きていく限り元氣や霊力の補給が必要で、さらには罪やケガレ、疫病などの「ゴミ」を祓わなくちゃならない。

よく、鏡餅やおせちなどは喪中のときは用意しないのですか、と聞かれます。死のケガレがついた人が年賀参りに来るのは縁起が悪いのと同様、書状での年賀参りとなる年賀状を、喪中だから遠慮するというのは分かります。でも、喪中であつても年は取らなくちゃいけないし、鏡餅やお正月のごちそうは、そんなときこそどんどん食べて元氣を回復しなくちゃだめなのです。

常世に帰る年神様 ケガレを祓うどんど焼き

年神様は、短ければ三が日、あるいは七日、小正月まで、長ければ1月いっぱいいるともいわれます。あなたの家にもまだいらっしやるかもしれません。どこから来てどこへ帰るのか。山のかなた、海のかなた、ニライカナイ(※)、常世の国、あるいは大空……。はっきりは分かりません。日本の神様のなかには、常にいるタイプもあれば去来するタイプもある

ります。だけど、祭る人のところに来る、祭らない人のところには来ない、とよくいわれます。

小正月にどんど焼きに乗って帰るといわれることもありすが、どんど焼きは神様を送るというよりも、お正月の門松やしめ縄などに依りついた汚れや災いを火で浄化させる意味があります。柳田・折口両氏は、年神様がやって来るのにつられて有象無象の邪霊や悪霊もやって来るといいます。そうした邪霊が、神聖な場所を守っているしめ縄などに、ハエ取り紙のようにつく。それを燃やして祓え清める。それがどんど焼きなのです。汚い物を焼き祓うとその価値が逆転して縁起物に変わります。その火で餅を焼いて食べると風邪をひかないとか中風にならないなどといったりします。

リセットを大切に それぞれのお正月を

最近はお正月を海外で過ごすなんて人も増えてきました。年神様はせっかく年に一度の福を持ってきたのだから留守かい、って思われるかもしれませんがね。古い考えの人は、「お正月は家にいるもの」と言うでしょう。でも、普段仕事で休みが取れない人たちならやはり旅に出るのも仕方ありません。お正月はリセット・リフレッシュが基本ですからそれもいい過ごし方でしょう。ただ、お正月から働いている人が多いのは、時代の変化を感じ

じます。かつては三が日に仕事をするなんてありえなかったものです。「怠け者の節句働き」などという言葉があります。みんなが休むときくらいゆっくり休ましましょうよ、って共通理解があったのです。それが、最近ではオン・オフのリズムもなくなりつつあります。昔は三が日は店が閉まっているから、年末の歳の市には買いだめに走りまわりました。今は元旦からコンビニが開いていますし、デパートもスーパーも2日には開きますからね。

僕は郷里の町場に古ぼけた小さな仕事場兼隠れ家を持っていて、そこで原稿を書いたりして過ごすのを楽しんでいますが、お正月だけは東京の家で過ごすことにしています。正月様も、まだこっこの家に来るだろうと。小さな神棚に、年明けの15分くらい前からお灯明をあげて静かに座っている。除夜の鐘が聞こえてきたりします。子どもの頃からそうでした。年が変わるときにはお灯明の前で静かに来し方行く末を思って、あと何回迎えられるかなあ、無事過ごせてありがたいなあ、とかいろいろと考えます。日本の神社や神様のことを研究していると、恵み深い自然への感謝だけなんです。神道とは何かといったら、自然の恵みに感謝し、先祖の御霊に感謝するだけ。やることは禊ぎ祓えのみ。お正月というのは、神道でも仏教でも静かに過ごすことが長い伝統だから、僕もそれでいいかなと思

今はお正月の迎え方もさまざまだと思います。ただ、新年を迎え、気分はきちんと切り替えるといいですね。節目をきちんとしていくとリズムができる。日本の暦でいいところは、新年と新年度、二つリセットの機会があること。

1、2、3月というあいまいな3カ月をいかに有効に過ごすかは、1年を有効に使うのに大事じゃないでしょうか。そしてお正月のリセットには、ぜひごちそうを食べましょう。おせち料理とか型にはまったものも楽しいでしょうし、自分の好物も食べる。僕もそうしています。ちよつとおしゃれにぜいたくを、っていうのがお薦めです。なんといっても基本はリフレッシュですから。

※南西諸島に伝わる外界観念。理想郷。



新谷尚紀 じんたに・たかのり

民俗学者。国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学名誉教授、國學院大學教授。現在、國學院大學大学院と文学部で民俗学の後継者育成に努めている。「民俗学とは何か―柳田・折口・渋沢に学び直す」「氏神さまと鎮守さま 神社の民俗史」など著書多数。